

石清水八幡宮警固社土橋本当矢家の古文書調査

—市民有志と共に歩む史料保存活動—

竹中友里代

1. 橋本家文書調査に至る経過

八幡市では2010年に市民団体「八幡の歴史を探究する会」が発足して以来、例会での講演会や社寺見学会の企画にとどまらず、個人や小グループによる地域の歴史研究が活発である。「古文書の会八幡」は、2009年頃から地元の古文書をテキストにして、くずし字解読講座を毎月定期的に開催し、輪読の成果は翻刻史料集『島田市郎家文書』、『滝本栞』、『柏亭日記』がある。八幡宮参詣道を示す江戸時代の道標を探索し、八幡市内だけでなく近隣の街道筋にも拡大し、2018年には、『増補版「石清水八まん宮道」に誘う道標群』を刊行した。道標の写真と銘文を記し、地図はネット上でも所在が確認できる。

こうした活動のなかで、近年失われつつある旧家の古文書を保存し、新たな地域史を描く取り組みとして、著者を含め市民有志とともに2015年「地域史料研究会やわた」が活動を開始した。八幡市内の寺社や個人蔵の古文書を中心に、整理や保存方法の研鑽を重ねながら目録採取・写真撮影し、所蔵者に報告している。著者もその成果をアクターや府大学報等で活用している。これら活動の中でかつて橋本町に居住していた橋本家から古文書を借用して、2017年1月に調査を始めた。

橋本家の古文書については、1975年頃から始まる八幡市誌編纂事業で、古文書の粗仕分けが行われた（図3）。1988・1989年京都府文化財保護課による古文書所在確認調査で概要が記録されている。橋本家は京大坂を結ぶ橋本の街道に面し、その北側で八幡宮や狩尾社への参詣道が交差する所にあり、茶舗を営み旧家のたたずまいを残していた。今は他府県へ移住され現在家屋敷は取り壊されている。会員の地道な活動と熱意が子息に伝わり、この度の調査に至った。

2. 橋本当矢家について

『八幡市誌』2巻では八幡の文化人として橋本等安が取り上げられているが、『山城綴喜郡誌』の引用にとどまっている。明治5年の橋本家由緒は、近世初期から記述し、今のところそれ以前については当家の記録は見いだせない。

しかし当家は、慶長5年(1600)徳川家康より57石4斗7升の朱印地を給され、安居本頭神人十二人組の筆頭である。建久2年(1191)に橋本重蔵、宝治元年(1247)に橋本豊前権守が安居神事を勤修し、地名をその名に冠し橋本町の本所として一族が往古より橋本に居住していたことは明らかである。

由緒書にある近世の初代は、源高好、通名は満介、後に不伯齋は、史料には等安として頻出する。『綴喜郡誌』では、橋本等安は連歌にすぐれ里村紹巴の門下で秀吉の御連衆として活躍

したとあり、本文書中にはこのことを裏付けるかもしれない天正から慶長期の連歌がある。歴史史料としてだけでなく、今後の調査によって国文学や文化財的価値付けが期待される。

3. 文書の全体像

2017年1月から2018年7月まで毎月1～2回、全44回の作業を行い、毎回作業内容を担当者が日誌に記録している。

はじめに古文書が収納されている各箱の外形の写真撮影と寸法・墨書銘・貼紙などの現況を調査カードに記録した。そして収納物の一括状況を写真撮影しながら、箱ごとに内容物の概要を確認した。次に文書1点ごとにラベルを貼付して番号を付しエクセルに目録をデータ化するとともに文書の写真撮影を行い、通例の古文書整理を行っている。

本文書群は、大小様々な木箱6箱に収納されている。箱別の収納点数及び写真撮影のコマ数は以下のとおりである。

	箱1	箱2	箱3	箱4	箱5	箱6	合計
文書点数	58	608	113	10	4	17	810
写真コマ数	372	1126	815	69	48	120	2550

古文書収納箱の形状・銘文、収納文書一括状況などを含め写真点数は総計2613コマである。

4. 箱別の古文書の概要

箱1は、6個の収納箱のうち唯一年紀があり、慶長12年(1607)橋本惣中帳箱であることがわかる(「現状記録(箱・容器)カード」参照)。蓋裏の貼紙には「正保三年戊辰正月□八ニト講次第、但無下行心経よミ、ふせハ中間ヨリ遣」とあり、「戊 休可、亥宗専、子 伝兵衛…(以下略)」と干支と人名が書綴られている。おそらく毘沙門堂で行われる八日講で般若心経を読み、講の仲間から導師への布施が集められ、毎年講の主催者名が正保3年(1646)から記されたものであろう。こうした講や町の諸行事に関わる帳面などの諸記録を保存する箱であった。

箱1には、明暦元年(1655)の朝鮮通信使通行に伴う船数・人足等配分覚や触状に、淀・伏見から天満橋までの淀川両岸街道図などがある。橋本町の氏神狩尾社関係では、寛文7年(1667)・宝永7年(1710)修復時の遷宮儀式の記録や修復棟札写、明治43年狩尾神社財産登録申請書等がある。石清水八幡宮の由緒や縁起、男山の境内を構成する堂塔宿坊や摂末社の建物規模、僧俗神人組織や放生会次第など石清水領の明細帳ともいえる「延宝注進」がある。他に年貢算用帳・積立講仕法帳・放生会の祭列図や版本の八幡宮本記7冊等が収納されている。

箱2は、田畑売買証文や金銭貸借証文が多いが、年紀の古いものは慶長期に遡り、山林の境界・山の権益にかかるものがある。慶長6年「惣中万日記」は橋本町諸勘定帳や慶長10年「万郷中覚日記」では人足家数が書き上げられている。茶屋仲間約定書や病人の介抱から死亡届等、街道筋での人の移動に伴う諸事件に対して侍中として橋本町の治安と町の自治運営にあたって

いたことがわかり、橋本町での旅籠や煮売り商など町人の営みが垣間見られる。ほかに、日清戦争に海軍兵曹として従軍した橋本郁次郎の書簡等がある。点数内容共に豊富で、内側にブリキ板を張り付けた茶箱に「重要書類 古文書 本橋本家」と貼紙され大切に保管されていた(図3上)。

箱3は、雑誌『日露戦争実記』・昭和16～18年『歴史写真』や教科書などの書籍類が主である。「高好連歌」は、元亀2年(1571)から天正14年(1586)まで橋本等安が主催した連歌に、里村紹巴の合点・朱点、講評などを取りまとめている。句会の参加者には、近隣の文化人に加えて、八幡宮所司の公文所や小禰宜座神人等の名があり、連歌を通して文化的ネットワークが明らかになる。ほかに明治23年八幡宮で開校された南山城養蚕伝習所の講義録等がある。

箱4は、武鑑・唐詩選・礼記などの版本の書籍類に、八日講・十日武射の儀式次第の記録がある。

箱5は、天正4年から同7年頃の橋本等安主催の連歌に里村紹巴の書状と講評等を卷子装にまとめている。

箱6は、橋本等安・橋本助六・橋本三河の三家に宛てた家康から家光までの領知朱印状7点に、明治に京都府に提出した橋本家の由緒書がある。慶長9年(1604)人足数記録や寛永8年(1631)等安土地目録、延宝8年(1680)田畑高帳などもある。

5. 今後の展望

今期までで文書全体の数量と概要は把握できたが、今後の作業については報告書作成に向けて、文書目録の編集及び翻刻史料を作成する。また橋本地域の地理的文化的環境を明らかにするために、橋本家の系図や関連資料のとりまとめを行う。さらに各会員の興味に沿って、コメントや論考の作成に取り組む予定である。

橋本は、淀川の舟運に関わり、京大坂を結ぶ街道沿いに発展し、男山の東側の山下門前各町同様に小社や寺庵などの宗教施設や道標・常夜灯などが多く、西側斜面には住宅開発により失われた古道があったという。石清水八幡宮や氏神狩尾社への参宮道には湧水・溜池や伝説の聖地・遺蹟があり、橋本惣中による仏神事が行われていた。人が行き交う街道では近世には茶屋や旅籠など庶民の賑わいがあった。大正から昭和に盛んであった橋本遊郭街では、小粋な透かし彫刻の欄間や擬宝珠の欄干に色タイル・スタンドグラスなど和洋入り混じった装飾の建物群は、石清水八幡宮の西側の景観であったが、近年町の様子は大きく変貌している。

橋本地区の根本である当家の古文書群は、特徴的な内容でありながら読み解いてにわかには核心に届く史料は少なく、これまで市誌等でも利用されることなかった。それゆえに地元で活動する有志らと共に歩み、伝承や石碑等あらゆる記録と合わせて、新たな橋本町の素描を試みようと思う。

現状記録(箱・容器)カード

地域史料研究会やわた			
文書群名	橋本当矢家文書	箱番号	1
形状	蓋付さ木箱	材質	杉板 板厚10mm
寸法	全体: 縦31.4cm×横28.5cm×高さ26.5cm 蓋・中蓋・下図の通り		
内容	橋本惣中関係の証書類多数 洋紙封筒に入っている。洋紙の包に入っている。 巻物8点、刊本8冊、洋画、地図等あり		
備考	箱全体が黒い。蓋りで付いた煤による黒色に見える。 蓋に文字が書かれているが判読出来ず。蓋の下にさらに中蓋状のものがある。図のように風が通る下に落ちないように作られている。皿の深さ約2.2cm。蓋裏面裏紙中蓋裏面裏紙箱の底面は、横破の下駄の蓋の2つに2枚の板をとり付け、水気は2つの穴から出る。		
記録銘文	〔箱外側全体図〕		〔箱裏面図〕
	〔蓋〕		〔中蓋裏側〕
調査日 2017年 1月 26日 記録者 望月亮郎			

図1 調査カード表

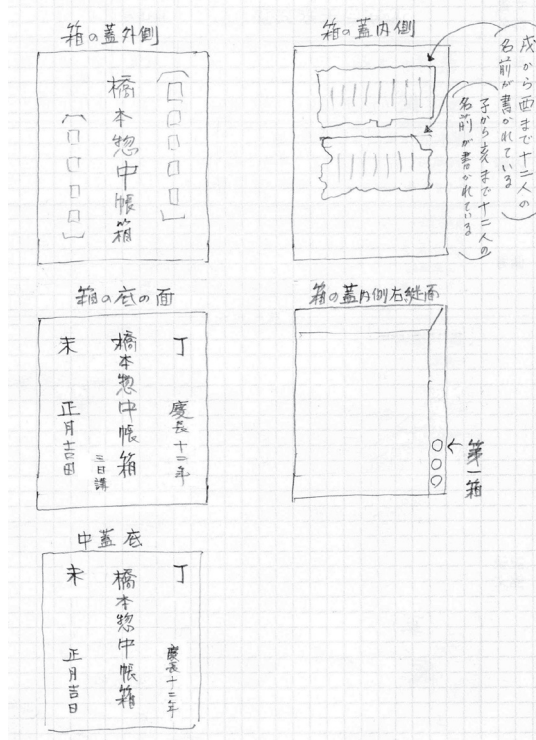


図2 調査カード裏 墨書銘の記録



整理作業の様子



図3 箱2 古文書収納状況

封筒・紙袋による粗仕分けが行われていた

